

『法華經』「從地涌出品」の精読

——インドのオリジナル『法華經』を求めて(Ⅶ)——

荀 谷 定 彦

はじめに

これまでの「法華經」思想研究は、二十七品（乃至、二十八品）から成る「法華經」の各品間における前後関係や所説内容の相違に重きを置いて考察するという、言うなれば「品」単位のものであったが、同一品の内にあっても随處に相違や矛盾が見出される——これを“後分”（＝後になって持ち込まれた、本来のものとは異質の思想）と名付ける——のであり、しかも『阿含』の初期經典（＝原始經典）が、仏陀釈尊の滅後に仏弟子たち所謂「五百阿羅漢」の「結集」⁽¹⁾（＝編纂）によって成立したのとは根本的に相違して、『法華經』も含めた初期大乘經典類は「仏に非ざる一人の比丘」の創作品として、即ち、そのオリジナルの段階において、しっかりとした構想の下、起承転結を備えて完結した一つの經典として出現したのであった⁽¹⁾。この観点から、これまで、各品の「精読」と題してその一品一品の中に立ち入って考察してきたのであり、ここでは「從地涌出品」を取り上げるのであって、その意味で「インドのオリジナル『法華經』⁽²⁾における「從地涌出品」の精読」なのである。

さて、本章に先行する「見宝塔品」の長行末尾で、釈尊は生きてままに仏塔に入り、多宝仏と並坐して自身もまた今や入滅せんとしていることを明示し、その上で「私の〈仏滅後〉において、一体誰が『法華經』唱導に堪えうるであろうか。この会座にはそのような者は一人として存在しない」と宣告したのである⁽³⁾。ここにおいて、会座の聴衆はこの〈仏滅後〉という事態の厳しさに“凍り付いた”といっても決して過言では

ない。そのような状況のもとで、「從地涌出品」は始まる。

【I】

〔1〕時に、他方世界からやって来た菩薩大士たちの内の八洄河沙に等しい菩薩大士たちが会座から立ち上って、世尊に向って合掌し、世尊を礼拝して世尊に次のように告げた。「世尊よ。もし世尊が許可されるならば、我々も如来の滅後に（『法華經』を）この娑婆世界で説き明かしましょう。〔他人に語って聞かせ（*vācayema*）、書写し、供養し、この法門に努力（*yoga*）を注ぎましょう。〕それ故（*tat*）、どうか世尊よ、我々にこの法門を（説き明かすことを）許可されよ」（と）。〔『土田本』253, 1-9.〔 〕内は後に付加・挿入された“後分”、以下、同じ〕

ここで、他方世界からやって来た菩薩が、どうしてこの娑婆世界での『法華經』唱導を申し出たのか。それは勿論、直前の「見宝塔品」の長行末尾で、釈尊は今、入滅の時に直面していると宣言した後、さらに、その〈仏滅後〉にあって『法華經』を唱導しうる者など、この会座には一人として無いという、あまりにも厳しい宣告に、居た堪れなくなったからであろう。これに対して、

〔2〕時に、世尊は（A）それら菩薩たちに次のように告げた。「止めよ。善男子らよ。お前たちのそのような行為が何になるか（＝全く無用である）。（B）善男子らよ。じつに私には、この娑婆世界において私の滅後、後の時、後の時期にこの法門を憶持し、他人に語って聞かせ、説き明かすであろうところの、六十洄河沙に等しい（数の、その）“千のぼさつ”（*bodhisattva-sahasra*⁽⁵⁾、＝六十洄河沙×“千のぼさつ”＝六万洄河沙のぼさつ）があるのである。〔（C）その一人ひとりのぼさつの眷属（*parivāra*⁽⁶⁾）は（たとえば）、丁度、同じように六十洄河沙に等しい“千のぼさつ”があつて、（彼らは）それらぼさつたち一人ひとりの眷属なのである。〕（253, 9-17）

ここにおいて、釈尊は（A）この他方世界からやって来た八洄河沙に等しい菩薩たちの申し出を「止めよ」と一言のもとに拒絶したのであって、それというのも、（B）すでに六万洄河沙のぼさつが〈仏滅後〉において『法華経』を憶持し、他人に語^ひって聞かせる唱導者として準備されているからと言うのである。こうして〔1〕、〔2〕は、本章の序幕をなしていると思えるのであるが、しかし乍ら、すでにこのように「法華経」唱導者が準備されているのであれば、「見宝塔品」長行末の「この会座には〈仏滅後〉において法華経唱導に堪えうる者は一人として無い」と宣告する必要などさらさら無かったであろう。しかもその上、そもそも「他方世界からやって来た八洄河沙の菩薩」なる者は、これまでの「法華経」には全く出てこない者である。それ故、この〔1〕と〔2〕は“後分”に他ならない。

こうして、本章は本来、次の〔3〕でもって始まっていたのである。

〔3〕〔釈尊によってこの言葉が発せられるや否や〕時に、（A）この娑婆世界（の大地）は到る處で裂け、裂け割れた。そしてその裂け目から金色（に輝く）身体の三十二相の偉人相を備えた多なるコーティ・ナユタ・百・千のぼさつたちが涌き出てきたのである。〔（B）（彼らは）じつにこの大地の下の虚空界（ākāśa-dhātu）で、じつにこの娑婆世界に依止して、日を送っているものであり、（C）じつにこの世尊の声（=[2-(B)]）を聞いて、大地の下から涌出したのである。〕⁽⁷⁾（253, 18-24）

ここに、本章はその数六万洄河沙の所謂「地涌ぼさつ」の突然の登場によって幕が上がる。

この後、「現行本」は、このぼさつの一人ひとりには六万洄河沙に等しい“眷属”（parivāra）があったのであり、これらぼさつの一人ひとりとはそれら眷属の“ガナを有する者”（gaṇin）、“大なるガナを有する者”（mahā-gaṇin）であり、“ガナの師”（gaṇa-ācārya）であった（253, 24-254, 2）と言う。さらにその後には、恐らく後の追加であろう、この地涌ぼ

さつの一人ひとりの眷属の数について、延々と、六十洹河沙から始まって、五十洹河沙、四十洹河沙と順次に減じていって、遂には眷属を一人も持たない単独の者に至るまでの無数の地涌ぼさつがある（253, 24-255, 8）と述べて、全体としては莫大な数を挙げて、一種“数字遊び”に興じており、さらには、これら地涌ぼさつは空中に浮ぶ仏塔内の釈迦・多宝の二仏、さらに十方からやって来た分身諸仏までもを礼拝し、賛辞を述べた（255, 8-22）と言っている。が、これらは全て前後の文脈から逸脱するもので、後分に他ならない。

〔4〕時に（A）それらぼさつたちが（続々と）大地の裂け目から涌出している間に、〔そして、如来たちを礼拝し、種々の菩薩の讃辞でもって讃歎している間に〕満五十中劫が経過した。〔（その五十中劫の間）かの世尊・釈迦牟尼・如来・応供・等正覚者は沈黙していた。そして（会座の）四衆もその間沈黙していた。〕（B）時に世尊は、次のような“神力所作”（*rddhy-abhisamskāra*）をなした。（即ち）そのような神力所作をなすことによって、四衆はそれを僅か（一日の）“食事後”（*paścād-bhakta*, = 昼食後の半日）と思ったのである。そして（その上）（C）この娑婆世界が（多なるコーティー…）百・千の虚空（*ākāśa*）で包まれており、ぼさつたちでもって充滿しているのをはっきりと見た（*adrakṣuḥ*）のである。（255, 23-256, 3）

ここに、（A）これら地涌ぼさつの地下からの涌出に「満五十中劫」も要したというのは、いかに地涌ぼさつの数が莫大であるかを、そして、その活動の場たる娑婆世界がいかに広大であり、時間的には〈仏滅後〉無仏・悪世がいかに永く続くかを示すものである。次に（B）の「これら六万洹河沙のぼさつ」の地下からの涌出には、実際は五十中劫も掛ったのであるが、仏の神通力の行使によって、たった昼食後の半日と衆生には思わせたのであり、さらに（C）「この娑婆世界が虚空で包まれており、ぼさつたちでもって充滿しているのをはっきりとこの眼で見た」というのは注目される場所である。これは、一体どういう事象を述べ

ているのであろうか。その回答は、後に「これら地涌ほさつはこの娑婆世界の地下にある虚空界に住している」と述べられることによって明らかになる。

さらにこの後、「現行本」には、この大なるほさつ・ガナ、大なるほさつ・群団 (mahato bodhisattva-rāṣī)⁽⁸⁾ には、その首座 (pramukha) として「上行」、「無辺行」、「浄行」、「安立行」という名の四人があった (256, 3-8) と言うも、「上行」以外の三人は、当該箇所その他には全く出てこないものであり、「上行」にしても、この後、最終章「如来神力品」の冒頭に、まるで“お副えもの”のようにちらっと出る (327, 20) だけであって、これらも後分に他ならない。その上、さらにこれら四人の菩薩は釈尊に挨拶し、御機嫌伺いをして、釈尊がそれに応えるという長文 (256, 3-257, 13) があるが、これもまた、“後分”と言うにも値いしない、単なる後代の付加・増嵩である。

【Ⅱ】

[5] さて、その時、弥勒菩薩と〔他の八洹河沙に等しい〕⁽⁹⁾ コーティー…千のほさつら (= 会座の全聴衆) には、次の(念い)があった。
「大地の裂け目から涌出した者〔世尊の面前に立ち、世尊を恭敬し、尊重し、敬い、供養し、世尊に挨拶しているこの大なるほさつ・ガナ、大なるほさつ・群団〕は、我々にとってこれまで見られたことの無い者であり、これまで(その存在すらも)聞かれたことの無い者である。一体、これらのほさつたちはどこから (kutah) やって来たのか」と。(257, 14-21)

ここに、本章の対告者の一人として弥勒菩薩が出てくる。ところで、弥勒菩薩の登場は「序品」が初出で、ここが二度目なのであって、その「序品」では、仏の爲した「放光による東方万八千の仏国土示現」の由縁を弥勒が文殊菩薩に問うたのに応えて、文殊菩薩が語った「日月灯明仏過去譚」は、丁度、公園の入口にある案内板のように、これから語る

れる『法華経』の所説内容を予告する重要なものであったが、そのように、この弥勒菩薩の登場する本章はこれに続く「如来寿量品」の思想解明に欠くことの出来ないものであることを示唆していると思える。

さて、弥勒菩薩と会座の衆全員は「大地の裂け目から涌出した」無数のぼさつを見て、「これらの者はこれまで見たことも、聞いたことも無い者で、『一体どこからやって来たのか』という念いを懐いた」と言う。しかし乍ら、冒頭〔3-(A)〕に「大地の裂け目から涌出した」とあるのに、「どこやって来たのか」とは、全くもって不可解極りない。しかも、〔3-(B)〕にすでに「(彼らは) じつにこの娑婆世界に依止するこの大地の下の虚空界で日を送っている」とあって、たちまちにそれとも矛盾をきたす。それ故、この〔3-(B)〕を先には後分と見做したのであるが、それにしても〔3-(A)〕「この娑婆世界は至る処で裂け、その裂け目から無数のぼさつが涌出した」と明言されているのであって、それにも拘らず、会座の衆が全員、「どこからやって来たのか」という念いを懐いたというのは全く不審である故に、この〔5〕全体が後分ではないかと思われる。

それはともかくとして、これに続く〔6〕を見るに、

〔6〕時に、弥勒菩薩は、自身にも疑惑、疑念のあることを知り、これら〔洹河沙に等しい〕コーティー…千のぼさつ (= 会座の全聴衆) の心の思念 (cetaḥ-parivitarka) を (己の) 心でもって気付いて、その時、合掌し、次に続く偈を頌して、世尊にその意味 (artha) を問う。(257, 22-26)

これは、先の〔5〕でこれら無数のぼさつが「どこからやって来たのか」という会座の衆の念いを承けて、弥勒菩薩はそれを代表して世尊にその意味を問うのであるが、それにしても、“なくもがな”と言える程の文ではある。しかも、その当の偈頌を見るに、

〔偈5〕(これら) 無辺の多・コーティー・ナユタ・千のぼさつたち (= 地涌ぼさつ) はこれまで見られたことがありません。両足尊よ。

（それですから）どうか告知して下さい。

〔偈6〕 これら大威神力を有する者たちはどこから (kutaḥ)、あるいは、何故に (katham)、やって来たのか。これらの者は見るからに（三十二の偉人相を有する）“偉人的存在者” (mahā-ātmabhāva) です。一体、どこから（ここに）参集したのでしょうか。

これに続く〔偈7〕から〔偈24〕は長行に謂うところのこれら地涌ぼさつの有する眷属について的一种“数字遊び”の重偈に過ぎず、〔偈24〕「これらぼさつの出現はどこからなのか」と言って結んでおり、要するにこれら二十偈はまるまる「これらの者はどこからやって来たのか」と問うものなのである。

ところが、これに続く〔偈25〕～〔偈31〕は次のようである。

〔偈25〕 誰によってこれらの者たちに教法が説示されたのですか。誰によって正覚に向けて出立せしめられたのですか。（これらの者たちは）誰の教誡に慣れ親しんでいる (rocanti) ののですか。誰の“教誡の憶持者” (śāsana-dhāraka) なのですか。

〔偈26〕 じつに偉大なる智慧を有し、神通（力）を備えた者（＝地涌のぼさつ）はじつに大地を完全に引き裂いて、あまねく四方に出現してきたのです。

〔偈27〕 ムニ（＝釈尊）よ。じつにこれら（地下から）出現してきた無畏のぼさつらによってこの（娑婆）世界はあまねく千々に引き裂れたものになったのです。

〔偈28〕 この者たちはじつにいかなる時にも我々によって決してこれまで見られたことの無い者です。（ですから）世間の導師 (loka-dhātor vināyaka) よ。その（“仏”の）名前 (tasya nāma)⁽¹⁰⁾ を告知して下さい。

〔偈29〕 じつに十方の（一切）処は我々によって幾度となく遊歴されたのですが、その我々によっても、これらぼさつたちは決して見られたことはないのです。

〔偈30〕（さらに言えば）我々によってあなた（釈尊）の息子（＝地涌のぼさつ）らのたった一人でも全然見られたことは無いのです。ムニ（釈尊）よ、この“成行き”（carita）を説き聞かされよ。

〔偈31〕（我々）ナユタ、百、千のぼさつ（＝会座の全聴衆）は（そのことに）非常な関心を懐いている者（kautūhala-prāpta）なのです。（ですから、その説明を聞かんとして）両足尊（＝釈尊）をじっと仰ぎ見えています。

これら〔偈25〕～〔偈31〕の七偈はじつに冒頭の〔偈5〕～〔偈24〕の二十偈の所説内容、即ち「これら無量の地涌ぼさつは一体どこからやって来たのか」という会座の聴衆全員の懐いた“念い”とは全く相違して、「これら無量のぼさつを教化した仏は誰か、その名を告知されよ」、さらには、それもすでに三十二相の偉人相を備えた大ぼさつまでに教化された者であって、「その訳（artha、理由）、その仏のなした“成行き”（carita）を是非とも仏の口から直に聞知せんと釈尊を仰ぎ見ている」と言うのである。ところが、これに続く最終〔偈32〕は次のようである。

〔偈32〕大勇（mahāvīra、＝仏陀釈尊）よ。限り無く（煩惱を）滅尽した方よ。これら勇者にして無畏なるぼさつたちは（一体）どこからやって来たのでしょうか。

これは明らかに〔偈5〕～〔偈24〕に至る間の（A）「これら無量のぼさつはどこから来たのか」に直結するものであるから、（B）「これらぼさつを教化した仏は誰か」と問う〔偈25〕～〔偈31〕はその前後を完全に（A）に挟まれて、謂わばその（A）の内に取り込まれ、埋没されてしまっているのである。しかし、その場合、これら無量のぼさつについて、（A）「どこからやって来たか」と問うことと、（B）「これ程までに教化した仏は誰か」と問うことのいずれが重要であるか、と言え、勿論それは（B）である。それにも拘らず、この〔5〕と〔6〕、そしてその偈頌段の「現行本」は全く逆であって、（A）「どこからやって来たのか」というのが主旨であるかのように、圧倒的分量でもって主張されて

いるのである。

ここにおいて、極めて大胆な憶測なれども、長行〔4〕に本来から接続していたのは、この〔6〕のうちの、弥勒菩薩のこれら無量のほさつの突然に涌出した『その訳』（*artha*, 理由）を説示されよ」と、偈頌段の〔偈25〕～〔偈31〕の「このような大ほさつにまで教化した仏は誰か」、さらには「その“成行き”（*carita*, 仏の教化の過程）を説き明かされよ」というものであったのである。ところが後になって、恐らくは、これらほさつは娑婆世界の地下の虚空界に住しているが故に、会座の衆は「これまで決して見たことの無い者だ」と言ったのである。ところが、その発言を取り違えた者が〔5〕「一体これらほさつはどこからやって来たのか」という“念い”と、〔偈5〕～〔偈24〕と〔偈32〕の、ただ一途に「どこからやって来たのか」という文段とを造出し、それを〔6〕とその偈頌段（〔偈25〕～〔偈31〕）の前に強引に割り込ませたのであって、その結果が、「現行本」の有り様に他ならないと思われる。それ故にこそ、この本来の〔6〕「世尊にその意味を問う」とその偈頌段（〔偈25〕～〔偈31〕）を承けて、次の〔7〕で、釈尊は「お前の尋ねるところの、これら無量のほさつを教化した仏は誰か、その名前と、さらにその仏の成した“成行き”（ほさつ教化の過程）を説き示されよ」という懇請は、「じつに“重要事項”（*udāra sthāna*）である」と言っているものであって、ここに〔4〕から〔7〕に至る文脈はよく通じて、首尾一貫するのである。

この後、十方世界から参集した釈尊の“分身諸仏”の、その侍者（*upasthāyaka*）たる菩薩らまでもが、「これ程の無量、無数のほさつたちはどこからやって来たのか」と各自の仏に問い、それら仏たちは、「それについては弥勒菩薩が釈尊に問うているから、それを聞くがよい」と応える長文（260, 10-261, 5）がある。しかし、これら十方分身諸仏は、先の「見宝塔品」で仏塔を剥いで、中に坐す多宝仏の姿を会座の衆に見せるための必須条件の一つとしてやって来たのであって、その役割はとっくに済んでいるのであり、それが今更ここに登場する必要性は

さらさらない。故に、これは全く無用の増嵩・付加である。それ故、本来、長行〔6〕「その意味を問う」とその後の偈頌（〔偈25〕から〔偈31〕）に続いていたのは、次の文であった。

〔7〕その時、世尊は弥勒菩薩に告げた。「善い哉、善い哉、アジタよ。

(A) お前が私に尋ねるところの、その事項 (sthāna) は、アジタよ、(じつに) 重要な (udāra) ものなのだ(と)。(B) 時に世尊は“オール・ぼさつ・ガナ”に告げた。「それ故に (tena hi)、善男子らよ。じつに (お前たち) 全ては“自制心ある者” (prayata) ⁽¹¹⁾ であるべし。〔(C) (お前たち) ぼさつ・ガナ全員は“甲冑で身を固めた者” (susamnaddha)、堅固なる力勢を有する者 (dṛdha-sthāma) であるべし。(D) 善男子らよ、如来・応供・等正覚者 (である私) は今や如来の智慧 (tathāgata-jñāna, 「現行本」は ‘tathāgata-jñāna-darśana’ であるが、‘darśana’ は衍字) を説き明かすのである。如来の威力、如来の為し業、如来の遊戯、如来の“あくび” (=ライオンが己の力勢を誇示する仕草)、如来の勇猛を (説き明かすのだ。)] (261, 6-14)

ここに、釈尊は「これら無数の地涌ぼさつに教法を説いた仏は一体誰か」という弥勒の質問に対して、(A) 「それはじつに“重要事項”なのだ」と言い、それ故に、弥勒だけではなく、“オール・ぼさつ・ガナ”、即ち、会座の全員に呼びかけて、(B) 「お前たちはこれから如来がいかなることを述べようとも、それを聞いて、決して己の自制心を失ってはならない」、即ち、驚愕や恐怖、動揺の念いを起さないよう、しっかりと己の心を自らで制御しなければならない、と訓告しているのである。それというのも、仏のこれから説き明かすところが、我々衆生の耳目を驚かすものであるからである。

これに対して、続く (C)、(D) は、お前たちは“甲冑で身を固めた者”であるべしと言い、仏たる私は仏智、乃至、如来の勇猛を説き明かす者である等の、大乘仏教 (=その中核は『般若経』) の用語を列挙して、仏の“超勝性”を主張するが、これは、〔6〕の弥勒の「仏の名を告げ

よ」という懇請に仏が応えて、〔7〕「それは“重要事項”だ」と述べたその言葉を大乘仏教の教説を指すと受け止めた上での“『般若経』の巻返し”に他ならない。続く偈頌段（〔偈33〕～〔偈36〕）を見るに、その殆どは〔7-(C)、(D)〕と同様、後の“『般若経』の巻返し”である⁽¹²⁾。

それでは、これから仏が語る事柄に決して“自制心”を失ってはならないという、その“重要事項”とは一体何なのか。それを明かすのが次の文である。

〔8〕時に、世尊はこれらの偈頌を語った後、弥勒菩薩に告げた。「アジタよ。お前たちに宣告する。〔そして、了解せしめる。〕(A) アジタよ。⑦お前たちによってこれまで見られたことのなかったところの、大地の裂け目から涌出したこれら無量・無数の、不可思議の、並ぶものの無い、計算出来ないぼさつたち、アジタよ、それら全てのぼさつたちは（私が）この娑婆世界で無上等正覚を覚った後に、私（＝“釈尊”）によって“鼓舞”された（samādāpita）〔利益され、喜ばされ、無上等正覚において円熟せしめられた〕のであり、そしてそれら善男子たちは、私によって〔この菩薩法において〕①“成熟”せしめられた（paripācita）〔（正覚に向けて出立せしめられ、導入せしめられ、理解せしめられ、悟認せしめられ、清浄ならしめられた〕のである。〔(B) ⑧そして、アジタよ、これらぼさつたちはこの娑婆世界の地下で虚空界に包摂されて（ākāśa-dhātu-parigrahe）住しているのである。(C) ⑨これら善男子らは（経典の）暗誦（svādhyāya、＝経論の暗誦とその教義学習）、講説（uddeśa、＝比丘同士の教義問答）、思索（cintā）、如理思惟（yoniso-manasikāra）に専念しており（pravṛtta）、④社交を楽しまず（a-saṅganika-ārāma）、交際を楽しまず、重荷（＝義務）を捨てず、精進努力を専らにしているのである。⑤アジタよ。これら善男子らは天・人に接近して暮すことをせず、交際行を楽しまない者である。⑥それら善男子らは法の楽しみを楽しみとし、仏智において精励している者である。〕（262, 3-18）

ここにおいて、オール・ほさつ・ガナ、即ち会座の聴衆全てに向かってこれから語られる私の言葉を心して聞くべしと、幾度も繰り返して告げていたところの、“重要事項”の内容が遂に説き明かされたのであって、それは、まず、㊦大地の裂け目から涌出した「地涌ほさつ」は全て、他ならぬこの娑婆世界で正覚を獲得した私（＝「釈尊」）によって正覚に向けて“鼓舞”されてきた者であり——これは私のなす衆生教化の第一ステージ——、さらに㊧「正覚において“成熟”せしめられてきた者」——衆生教化の第二ステージ——に他ならない、と明言している。これは先の〔偈25〕「一体誰がこれら地涌ほさつに教法を説いて正覚に向けて出立させたのか、誰の教誡に慣れ親しみ、誰の教誡の憶持者なのか」という質問に対するまさしく私の回答に他ならない。次に、(B)㊨は、長行〔5〕「これら地涌ほさつはこれまで全く見たことのない者であって、一体どこからやって来たのか」と疑問を懐き、〔偈6〕「どこからここに参集したのか」という弥勒の質問に答えて、再度、ここで「この娑婆世界の地下の『虚空界』（一種“巨大空間”）で虚空に包摂されて暮している者である」と言うのであって、これは上述のように、後分たる〔5〕とその重偈であった〔偈5〕～〔偈24〕、〔偈32〕が持ち込まれた時点でそれに同調させるべく、ここに付加・挿入されたものに違いない。こうして、「地涌ほさつ」は、じつに今、地下の虚空界に住しており、将来、釈尊の入滅後に、即ち、娑婆世界が〈仏滅後〉無仏・悪世となった時に、始めて地上に出現して『法華経』を唱導するべく待機中の者なのであるが、突如、仏在世時の娑婆世界に、即ち、全く異次元の世界に出現することになった為、現に今、住んでいる“虚空”にすっぽりと身を包んでつまり一種カプセルの中に入って、ここに登場しなければならなかったのであって、そのことを言うのが、長行〔4-(C)〕「この娑婆世界は（多・コーティー・ナユタ・）百・千の虚空で包まれており、ほさつたちで充滿している」という文である。これは、丁度、月に到着した宇宙飛行士が月面に降り立つためには、宇宙服にすっぽりと身を包まな

ければならなかったのと同じである。

これに続く（C）㊦、㊧、㊨、㊩は、これら地涌ぼさつが今まで地下の虚空界でどのような修行をなし、どのように暮らしているかを述べたもので、それも、この順序で次々にそれぞれ別人の手によって付加されたものと思われる。が、しかし、ここでは、未来の〈仏滅後〉に地上に出現して『法華經』唱導をなすこれら地涌ぼさつは「じつに釈尊一人によって教化（＝鼓舞から成熟）されてきた」ということだけで十分であって、これまでの修行が何であったかは全く関係のないことである故、これまた後分に他ならない。

これに続く偈頌段（〔偈37〕～〔偈43〕）を見るに、①〔偈37a〕「これら（地涌）ぼさつたちは無量であって」、②〔偈38a〕「それら全ては、私（＝釈尊）によって正覚に向けて鼓舞された者（*samādāpitāḥ*、〔現行本〕‘*paripācitāḥ*’なれど私に校定）である」のであり、③〔偈38c〕「それらの者全てはじつに（さらに）私によって成熟せしめられた者である」と言い、④〔偈40a〕「（それら全ては）ここなる（娑婆世界の地下）で虚空に包摂されて（*ākāśa-parigraha*）住している」と言う、これら①～④の四句でもって、本来は一偈をなしていたのであって、即ち、

〔新・校訂偈37〕これら（地涌）ぼさつたちは無量であって、（それにも拘らず）それらの者全てはじつに私（＝仏陀釈尊）によって正覚に向けて鼓舞された者であり、（さらには）じつに私によって（正覚において）成熟せしめられた者なのであり、ここなる（娑婆世界の地下）で虚空に包摂されて住している。

これは、長行〔8-㊦、㊧、㊨〕と完璧、かつ簡潔に一致する。残りの〔偈37bcd〕「（これら地涌ぼさつは）神通、智慧、学識を備え、〔偈38d〕「私の息子（＝菩薩）である」と言い、〔偈39〕「林棲住の者で、頭陀行をなし、人との交際を避け、私の息子、私に見習う者である」と言い、さらに〔偈41〕では、「精進努力に励み、明晰なる意識を有し、畏れることなく説法をなし、光り輝く私の息子である」と言う。これらは

全て我々〈仏滅後〉の衆生にとっては、知ることの何ら不必要な事柄であるけれども、このように地涌ほさつがすでに高い菩薩の境地に住していることを述べるのは、それによってそれらを教化した釈尊の“超勝性”を主張せんがためである。さらに続いて、次のように言う。

〔偈42〕（私は）**ガヤーの都城の近くの（菩提）樹下でこの最高の正覚を獲得した後、無上の法輪を転じて（以来）私によって（これら地涌ほさつらの）全ては、ここ（なる娑婆世界の地下にある虚空界）で（正覚に向けて鼓舞され、さらに）正覚において成熟せしめられてきたのである。**

凡そ仏の衆生教化は、勿論、仏の成道後の転法輪（＝説法）によるものであるからして、釈尊にあってもガヤーの菩提道場での成道の後、初転法輪、即ち、仏の為し業である説法を開始して以来、今に至るまで「常説法」であることは当然のことであって、ここにおいても、〔新・校訂偈37〕に謂うように、なんと、現に今はこの世界の地下の虚空界に住するこれら地涌ほさつに対する教化もまた当然のこと、この間に釈尊によってなされたものに他ならないと言うのである。それ故、本偈は〔新・校訂偈37〕に続いていたに違いないのである。しかし乍ら、今、現にこの娑婆世界に出現して衆生教化に励んでいる今仏釈寸が一方では、同時に現在は地下の虚空界に在るこれら無量のほさつをも、教化——正覚に向けての鼓舞から正覚における成熟にまで——をなしているという事など、どう考えても到底あり得ない事——それでこそ〔7〕で“重要事項”（udāra sthāna）と言っていたのであるが——である。それにも拘らず、ここでこのように述べている限りは、どうしてもそう言わなければならない「その訳」（artha, 根本的理由）、というか必然性があつたからに他ならないであろう。ではその根本的理由とは何か、それを窺わせるのが次の偈である。

〔偈43〕（A）このように遥か昔に（ciram）私によって最高の正覚が獲得されたのであり、（それ以来、今に至るまで）これらの者（＝地涌

ぼさつ) 全ては、じつに私によって（鼓舞から、さらに）成熟せしめられてきたのである。（B）この無漏にして真実なる私の言葉を聞いたからには（お前たち）全ては私の（述べる所）を信じるべし。

これは、一瞥しただけでも、どうしてこのような偈がここに存するのか、不可解極わまりないものである。なぜなら、「このように遙か昔に私は正覚を獲得したのである」と言うが、そのようなことは、これまでどこにも述べられておらず、それどころか、次章「如来寿量品」になって、初めて「今、世間（の人々）は、世尊・釈迦牟尼・如来はガヤーの近郊の菩提道場に在って正覚を覚った、と思っているが、決してそうではなく、私には正覚を覚ってから今にじつに多なるコーティー…千の劫が存するのだ」（269, 1-6）とあり、その多なるコーティー…千の劫を「五百塵点劫の喩」で説明した後、「このように遙か昔に正覚して（tāvaticira-abhisambuddhah）（今に至るまで）不可量の寿命の量を有する如来」（271, 14-15）と言うところなのである。それにも拘らず、今この「從地涌出品」で、「私は遙か昔に正覚を得た」と言うのは、次の「如来寿量品」を全く撥無するものに他ならない。それでは、なぜ、ここでこのような「如来寿量品」の所説の一部を取り出して言うのか、それについては「おわりに」で言及するところがあるであろう。さらに、それは差し置くとしても、これは、恐らくこの〔8-㊦、㊧〕の仏の言葉に対して、次の長行〔9〕が謂うように、弥勒や会座の衆に「不可思議にして稀有であり、驚きの念を生起させる」ための一種“誘い水”を向けたものなのであろう。

こうして、長行〔8〕とのその偈頌段の〔新・偈37〕と〔偈42〕は、虚空（のカプセル）に身を包んで、突如、ここに涌出した地涌ぼさつについて、この者らは、この娑婆世界の地下にある虚空界に住しており、しかも、この娑婆世界の教主たる仏陀釈尊によって、それも唯一人^{ただ}で、鼓舞され、成熟せしめられてきた者であるという、この思いもよらなかった事象が明らかにされたのである。

【Ⅲ】

それでは、この地下の虚空界に住する「地涌ぼさつ」を正覚への鼓舞から正覚における成熟にまで教化してきたのは“釈尊”一人に他ならないと明かす“重要事項”を弥勒を始めとする会座の聴衆はどのように受け止めたのであろうか。

〔9〕時に、弥勒菩薩と多・コーティー…千のぼさつら（＝会座の全聴衆）は不可思議（の念い）を得、稀有（の念い）を得、驚き（の念）を得た（vismaya-prāpta）。（即ち）『（これは）一体どういうことか（katham nāma）。（釈尊と謂えば、29出家、35成道、80入滅という通念に従って）このほんの一瞬の行住（kṣaṇa-vihāra、説法による衆生教化の活動）によって、（即ち、僅か四十余年という）短い期間でもって（alpena kāla-antareṇa）このような無量のぼさつたちが鼓舞され、無上正覚において成熟せしめられたとは』。（263, 21-264, 3）

ここに、弥勒と会座の衆は、これに先立ってなされた仏の重々の訓告（長行〔8〕と〔新・偈37〕、〔偈42〕）によって、自制心を失って動転するようなことはなかったが、“驚きの念”は禁じ得なかったのである。

〔10〕時に、弥勒菩薩は世尊に次のように告げた。「(A) 世尊よ、（これは）どういうことでしょうか。今日、如来（＝仏陀釈尊）は年若くして、カピラヴァストウの釈迦族の都から出家し、ガヤーの町から程遠からぬ勝れた菩提の座の頂きに到って無上正覚を覚られて後、世尊よ、今に（至るまでの）時間（の経過は、僅か）四十余年でしかありません。(B) それで（tat）、世尊よ、どういうことでしょうか。それ程の（短い）期間に、如来によってこの無量の“如来の為し業”（tathāgata-kṛtya、＝無数の地涌ぼさつの教化）が為されたとは。〔如来（＝釈尊）によって如来の威力、如来の勇猛が為されたとは。(C) 世尊よ、この当の（yaḥ idam）ぼさつ・ガナ、ぼさつ・群団（＝地涌ぼさつ）がそれ程の（短い）期間に無上正覚において鼓舞

され、成熟せしめられたのです。(D) 世尊よ、そのぼさつ・ガナ、ぼさつ・群団の（人数を）数えるとして、コーティー…千の劫に及んでも、その終りは得られないのです。(E) 世尊よ、このようにこれらぼさつ大士たちは無量なのであり、(F)（しかもこれまで）永く梵行を修行してきた者、（すでに）多なる百・千の仏の下で善根を植えてきた者、多なる百・千の劫にわたって（菩薩行を）成就させてきた者であって、このように数えきれないのです。] (264, 3-16)

この文段のうち、(A)、(B) は、〔9〕で謂う弥勒菩薩らが懐いた「不可思議…驚きの念」をより詳細に述べたものであって、仏陀釈尊は29出家、35成道、80入滅という史実の伝えるように、説法教化という“如来の為し業”は僅か四十余年という短い期間しかなく、その期間にあって、地上における衆生教化と同時に、地下の虚空界に住するこの無数の地涌ぼさつの教化をなすことなどどうして可能であるのか、と問うものである。

しかも、ここには、もはや“驚き”の念というような度合をはるかに越えて、「いかに仏と雖も、この短期間にこのような如来の為し業は到底“不可能”ではないのか」という、一種「詰問」の色合いを帯びているのであって、それを表すのが、後半の(C)以下で、特に(E)、(F)である。しかも、これは、“不可能”とする理由を、仏の教化期間の短さということから教化される地涌ぼさつに転換して、地涌ぼさつの数がいかに莫大であり、しかもその上、彼らは永年にわたって梵行を修し、善根を積み重ね、菩薩行を成就させてきた者であると述べて、その可能かを問うのである。しかし、このようなことは、これまで全く述べられてこなかったことである。故に、この後半部(C)以下は全て後分と見るより他ないものである。

さらに、続いて弥勒菩薩は次のように言う。

〔11〕 例えば、丁度ある一人の若者があって、(彼は) 年若く、黒髪で、

秀でた若者に相応しく、^{よわい} 齡二十五である。その者が齡百の者を指して次のように言うとする。『善男子らよ。この者らは私の息子である』と。そして、齡百の男たちも次のように言う。『この男(janaka)は我々の父である』と。(この場合)世尊よ。その男(=二十五歳の若者)の言葉(=百歳の老人たちを指して、これらは私の息子である)は(到底)信じられず、世間(の人々)にとっても、(それは)信じ難いであろう。(264, 17-23)

これは、いくら“譬え”だといっても、あまりにも荒唐無稽な話である。なぜなら、地涌ほさつと仏陀釈尊の関係は師匠と弟子の関係であって、とてもではないが、“親子関係”ということでは無いし、そもそも、ここで百歳の老人に譬えられる地涌ほさつは、父に譬えられる仏陀釈尊の入滅した後に、即ち〈仏滅後〉になって始めてこの地上に出現する者であって、決してこの譬えのように同時存在することは無いからである。それ故に、これの後分であることは勿論であるが、しかし同じ後分と言っても、この場合、先の〔10-(C)-(F)〕の後分とは、あまりにも差異があり過ぎる感があって、それとは別の者が後になって持ち込んだ“第二次的後分”と見るべきであろう。

このことは、この後、弥勒菩薩がさらに次のように言っていることから明らかである。

[12] このように、(A) じつに世尊は無上等正覚を覚ってから(今) 永くはない者(a-cira-abhisambuddhaḥ)なのであり、(一方) (B) これら(地涌)ほさつたちは多にして無量で(bahu-aprameya)であります。(C) (しかも)すでに多なるコーティ―千の劫にわたって梵行を行じた者、永い間にわたった末に仏智の(獲得が)確定された者(kṛta-niścaya buddha-jñāne)、百・千の三昧の門の出入に長けた者、大神通の修練に長けた者、大神通顕現の修練をなし終えた者、仏の住地についての“賢者”(=よく熟知する者)、如来の經典の合誦(=布薩における波羅提木叉の誦など)に長けた者、世間

にあって不可思議にして稀有なる者、偉大な精進、能力、力勢を獲得した者なのです。それにも拘らず（D）世尊は彼らについて、次のように仰せです。『彼らはじつに始めから（āditas）私によって鼓舞され、成熟せしめられてきた者である。そしてこの菩薩地において円満成就せしめられてきた者である。（E）（それ程に、私が）無上正覚を覚った後で、私によってこの一切の（如来の為し業である）精進努力、勇猛が為されたのである』と。（264, 23-265, 4）

これは、先の後分である〔10-(C)-(F)〕における地涌ほさつについての叙述を一段とグレードアップして述べて、そのような高い境地に到達した地涌ほさつの教化が、釈尊によって四十余年の短期間に、それも唯一人で、為されたとすることの不可能性をより一層強調するものであって、じつに全文の後分、それも第三次的後分であること明白である。

それでは、なぜこれ程までしてその不可能たることを主張するのか。ここに、その者の心の内に分け入ってみるに、そこには、「（私は）正覚を覚ってから（今に）永くはない者（a-cira-abhisambuddha）」であって、しかもそれでいて「（これら地涌ほさつをその）始めから（āditas）鼓舞し、成熟せしめてきた」という言葉とは全く裏腹に、次章「如来寿量品」の「現行本」が謂うように「このように遙か昔に正覚した（tāvat-cira-abhisambuddha）如来（＝仏陀釈尊）は（今に至るまで）常に生きて在って（sadā sthitaḥ）（説法している）」（271, 14-15）に依拠して、弥勒や世間一般の人々の想いのような仏の衆生教化は四十余年という短期間では決してないことを躍起になって主張せんとする様が窺えるのである。こうして、この〔11〕、〔12〕は、〔10-(A)、(B)〕でいう弥勒の疑念に、あたかも火に油を注ぐように一段と煽りたてて、詰問どころか、仏の言葉に反撥せしめんとする意図をもつものなのである。

〔13〕 勿論、世尊よ。（A）我々は『凡そ如来は（決して）“間違ったこと”（＝うそ）を語らないお方です（an-anyathā-vādin）』（から）この仏のお言葉を信じております。（なぜなら）如来（であるあなた）こ

そ（釈尊一人によってこれら無数の地涌ほさつの教化がなされたという）その（真実の）意味を知っておられるはず（ので）。（しかし乍ら）（B）（現に今）新発意の菩薩らは“疑惑”を起しています。（C）まして如来が入滅されたという状況下（＝〈仏滅後〉）にあっては、（全ての衆生は）この法門を聞いても、（とてもそれを）受け入れ、信じ、強い志向を向ける（adhimokṣyanti）ことはないでありますよ。〔（D）（ですから）そのことから、世尊よ。彼らは“仏法（＝真理）の破滅”を惹き起すことになるであろう（dharma-vyasana-samvartatīya）ところの、（悪）業の造作を（karma-abhisamkāreṇa）身に帯びた者（samanvāgata）となるでしょう（からです）。〕（E）ですから、（勿論）我々はこの教えに（これほっちも）疑念の無い者です（が、しかし）未来時の（＝〈仏滅後〉の）〔菩薩乘に属する〕善男子・善女人までもが（これを）聞いて疑惑を起さないために、どうか、世尊よ。その（真の）意味を説示して下さい。（265, 4-14）

ここに、弥勒自身「これら地涌ほさつを教化したのは四十余年の短期間での、それも私一人である」という釈尊の言葉に“疑念”を懐き乍らも、それを心の内に抑え込み、表向きは「我々はどこまでも仏の言葉を信じます」と言い、その代りともいうように、新発意の菩薩と〈仏滅後〉の衆生を引合いに出して、（C）彼らはこの法門を聞いても、とてもではないが、受け入れ、信じ、強い志向を向ける（＝信解する）ことは無いでしょう」から、（E）どうか〈仏滅後〉の衆生のために真の意味を説示されよ」と仏に懇請しているのである。ここまでの、〔10-（A）、（B）〕に続く文であった。ところが、その場合、〈仏滅後〉の衆生がもし受け入れず、乃至、強い志向（＝信解）をもつことが無かったならば、どうなるかという、すでに当時、宿命論と化していた“業・輪廻”思想を持ち出してきて、“仏法の破滅”を招くであろう究極の悪業を身に帯びる者となるという極め付きの“威し”をかけているのが（D）である。即ち、そこまでして「如来寿命品」の釈尊を“永遠仏”もしくは

“超越者”と改ざんした者が、己の主張を通さんとして、弥勒菩薩の口を介して、つまり、弥勒をして“狂言回し”というか、道化者に仕立てて、もし釈尊がこのまま何の説明もなしに済されれば、〈仏滅後〉の衆生は三悪趣に墮すことになるかと威し付けて、釈尊に説明を強要するところの第四次後分なのである。

次に偈頌段（〔偈44〕～〔偈54〕）を見るに、

〔偈44〕 世間の保護者よ。（あなたは）カピラという釈迦族の国に生まれ、出家して後にガヤーという名の町で正覚を獲得された方です。

その時から（今に至るまでの）期間（＝仏としての衆生教化の活動期間）は（僅か四十余年という）短い（alpa）ものです。

これは、長行〔10-(A)、(B)〕に相当するところである。そして、その(C)に謂うところの「その短期間に釈尊はこれら無数の地涌ほさつをただ一人で正覚に向けて鼓舞し、正覚において成熟せしめてきた」という肝心のことについては、

〔偈47〕 じつにあなたには斯くの如きの“稀有なること”（adbhuta、= たった四十余年という短期間にそれも、ただ一人でこの無数の地涌ほさつを教化したこと）があるのです（が、）そのことをこれら（会座にある）新発意の菩薩らはどうして信じる事が出来るでしょうか。

（このような）疑惑を除くためにその（訳を）語られよ。あなたのみ、じつにその訳がどのような（yathā）を説示しうるのです。

とあって、この偈は長行〔10-(C)〕に相当するものであるが、その間にある〔偈45〕は、これら大集団の地涌ほさつは全て、多なる劫にわたって修行し、般若（智慧）の力勢を得た菩薩であると言い、〔偈46〕では、泥池に咲く紅蓮華が汚されていないように、大地の下から涌出しながら汚れがなく、大王の息子の如くであると言うも、いずれも〔10〕には相当する所がないのである。

さらにこの〔偈47〕に続く〔偈48〕、〔偈49〕は、長行〔11〕の黒髪の若者が父であり、白髪の老人はその息子であるという“譬え”に相当し、

〔偈50〕は、地涌ぼさつは正念（smṛti, 明晰なる意識）を有し、般若において無所畏であると言ひ、〔偈51〕では、堅固心を有し、聡明で、教法の論義に畏れ無く、世間の導師たちによって称賛されているとあって、これらは、長行〔12〕に相当し、これまた後分に他ならない。次に〔偈52〕では、風が空中（antariksa, 「現行本」‘ākāśa’ とあるも、私に校定）にあって自在であるように、何ものにも無所依（＝執着しない）であると言うも、長行に相当するところがなく、後分に他ならない。

〔偈53〕まして、世間の導師たちが入滅した後（＝〈仏滅後〉）では、どうしてこのことが信じられましょうか。（勿論）我々には、世間の保護者に面と向い合っていて（＝直接に）聞いたのです（から）いかなる疑惑もありません（が）。

これは、先の〔偈47〕の、「新発意の菩薩は疑惑を懐くであろう」を承けて、まして〈仏滅後〉の衆生には、当然のこと疑惑が生ずるに違いないのですから、どうかその真の意味を説示されよ、と懇請しているところの、長行〔13-(A)、(B)、(C)と(E)〕にまさしく相当する。そして最終〔偈54〕は次のように言う。

〔偈54〕（大乘の）菩薩ら（＝総じて〈仏滅後〉の衆生）がこの（重要な）**事項**（sthāna, = 釈尊が僅か四十余年という短期間にこれら無数の地涌ぼさつを、それもたった一人で教化したこと）に**疑惑を起して**（“仏法の破滅”という究極の悪業を犯し、その悪業の報いとして次生に）**悪趣**（＝地獄）に赴くことがある勿れ（＝あってはならない）。（そのためには）**世尊よ。あなたはこれら（地涌）ぼさつたちが**（あなた一人によって短期間に）**どのように（鼓舞され）成熟せしめられたのか、そのありようの限り**（yathavat, = 実態）**を説き明かされるべきです。**

これは、まさしく長行〔13-(D)〕に相当するところであって、宿命論と化した“業・輪廻”思想に依拠する“おどし文句”に他ならず、第四次後分であること明白である。こうして、本章は終わっている。

おわりに

本章は冒頭、突如、大地は裂け割れ、その裂け目から多なるコーティー…千の無数のほさつが虚空に包まれて涌出し、空中（antarikṣa、=大地と天界との中間）に留まり、それによって娑婆世界はまるで虚空でもってだき抱えられているかのようになる。これを目の当りにした弥勒菩薩は、これら地涌ほさつを教化（=正覚における鼓舞から成熟）した仏は誰か、と釈尊に問う。それに応えて釈尊は、「汝の質問はじつに“重要事項”である」と言った上で、これら地涌ほさつをその当初から教化してきたのはこの私（=釈尊）で、それもただ一人で為してきたのだ、と明かしたのである。

しかし乍ら、弥勒は元より会座の衆全ては、仏陀釈尊は29出家、35成道、それ以降の説法教化を経て80入滅という通念の下、仏の教化活動の期間は“四十余年”という短期間しかなく、いくら仏と雖もその短期間でこれ程の無数の地涌ほさつの教化は到底“不可能”ではないのか、という疑念を懐いたのであって、ここに、仏の金口直説の言葉とそれを不可能とする己の疑念との板挟み、ディレンマに陥るが、現に疑念を懐いている新発意の菩薩は勿論のこと乍ら〈仏滅後〉の衆生を引合いに出して、彼らにかこつけて、その者らは到底この仏の言葉を信じるとは思えませんから、どうか、この事（=釈尊一人による短期間における無数のほさつの教化）の真実相を説き明かされよと懇請する。それにも拘らず、その回答は全くないままに、本章は終っているのである。

以上が本章の主旨、即ち、首尾一貫する文脈の“本流”なのであるが、「現行本」にはこの本流からは全く逸脱した、謂わば“淀み”としての後分、しかもその大量の付加・挿入があり、それが本来の流れを滞らせて、肝心の主旨の把握を妨げているのである。そのうち、最たるものとして次の三つが挙げられる。①ここに涌出した六万洹河沙の菩薩には「眷属」があったと言い、その数について二度にわたる増高をなした挙句の果てに、龐大な集団を形成した結果、その統師者として「上行」等

の四大菩薩なるものを造出したのであり、②これら地涌ぼさつの地下の虚空界からの涌出を目撃した弥勒菩薩や会座の衆の「このようなぼさつらは今まで見たことも無い」という発言は、これらの者が地下の虚空界に住するが故であるのに、その意味を取り違えて「この者らは一体どこからやって来たのか」という疑念を起したとして、長行〔6〕の偈頌段のうちの〔偈5〕～〔偈24〕、〔偈32〕で弥勒は「これらの者はどこから来たのか」と執拗に問うという話をこれまた造出し、しかもそれを元から在った〔偈25〕～〔偈31〕の前に強引に割り込ませて、その後分であることを隠蔽せんとしているのである。さらに③仏が、この弥勒の執拗な質問に応えた長行〔8〕とその偈頌段（〔偈37〕～〔偈43〕）の中の、その〔偈43〕「遙か昔に私によって最高の正覚が獲得されたのであり、（それ以来、今に至るまで）これらの者は全てじつに私によって（鼓舞からさらに）成熟せしめられてきたのである」と言っているのである。これは、次章「如来寿量品」の「現行本」における「私には正覚を覚ってから今にじつに多・コーティー…千の劫があつて、その間、常に生きて在る（*sadā sthita*）」という“改ざん”を承けたものに他ならず、それがこんな処に出てくるということ自体、この〔8〕と〔偈37〕～〔偈43〕が、「如来寿量品」を改ざんした者の手によってここに付加された後分であることを明白に示しているのであつて、恐らくは、これの付加・挿入をなした際に思わずぼろっと漏らしてしまったもの、“思うことを寝言する”の類であろう。

こうして、仏陀釈尊と言えば、「29出家、35成道、その後の転法輪（＝説法）、そして80入滅」という世間の通念による限り、釈尊の“仏としての為し業”たる衆生教化は僅か四十余年であつて、そのような短期間でこれだけの無数ぼさつを教化することなど到底“不可能”である（長行〔10〕～〔12〕）と、弥勒菩薩は猛然と反撥する。そして挙句の果て、ディレンマに陥った弥勒は、なんと釈尊がこのまま何も語ることなく済ますならば、我々は仏の言葉を信じるけれども、〈仏滅後〉の衆生は信

じることが出来ずに“仏法の破滅”という大なる罪業を犯し、それによって後生は墮獄するであろう（長行〔13〕と、“威し”をかけているのであって、そこまでしても、仏の僅か四十余年という短期間でのこれらほさつの教化の不可能なることを言い張っているのである。

一体、これはどう理解すべきであろうか。再往、ここにおいて、弥勒菩薩をしてかく言わしめている側に立って臆測する時、そこには、世間一般の「35成道、80入滅」という通念に真向から反対する“一つの新しい仏陀観”が確信されて存していたに違いないのであり、それを主張せんとしてこのように世間の通念への反撥を強調しているのではないかと考えられる。では、その“新しい仏陀観”とはどのようなものなのか。それを窺い知らしめるものが〔偈43〕「このように遙か昔に私によって最高の正覚が獲得されたのであり、（それ以来、今に至るまで）これらの者（＝地涌ほさつ）全てはじつに私によって成熟せしめられてきたのである。この無漏にして真実なる私の言葉を聞いたからには（お前たち）全ては私の（述べる所）を信じるべし」である。これは現行「如来寿量品」の、釈尊をもって「遙か昔の成道以来、（今に至るまで）常に（sadā、ずっと）生きて在り（sthita）、入滅することの無かった如来（a-parinirvṛtaḥ tathāgataḥ）」即ち、釈尊の“永遠仏”たること、乃至は“超越者”たること——これは本来のもの“改ざん”に他ならないのだが——の主張そのものなのである。このことは、取りも直さず、本来の「如来寿量品」を改ざんして釈尊をもって“永遠仏”とする一つの新しい仏陀観を樹立した者が、その己の仏陀観を主張するためにこの「従地涌出品」を丸々造出して、しかもその後分であることをカムフラージュせんと「如来寿量品」の前に挿入したものに違いないのである。そこからして、「はじめに」で述べたところの、前行する「見宝塔品」長行末尾の、生きたままに仏塔に入り多宝仏と並坐した釈尊が自身も今や入滅に直面していると告げた後に、言葉を継いで「私の〈仏滅後〉に『法華経』唱導をなしうる者など、この会座には一人として無い」とい

う厳しい宣告は、まさしくこの「従地涌出品」の挿入に際しての一種車両の“連結器”の如きの役目を果たすべく、付加・挿入された文言に相違ない。

このように、極めて大胆ではあるけれども、臆測することによってのみ、上述してきた数々の疑問点は全て解消するであろうものである。⁽¹⁴⁾

引用文献略号

『岩本訳』：『坂本訓訳』に同じ

『植木訳』：植木雅俊『法華経』岩波書店

荻谷〔2014〕：「法華経の成立」（『シリーズ日蓮 1 法華経と日蓮』（4-33）春秋社

〔2019〕：「『法華経』「見宝塔品」の解明——インドのオリジナル『法華経』を求めて（Ⅵ）——」『東方』第34号

〔2020〕：「『法華経』の釈尊は“永遠仏”か「如来寿量品」の精読——インド・オリジナル『法華経』を求めて（Ⅷ）——」『桂林学叢』第30号予定

荻谷『〈仏滅後〉』：『法華経〈仏滅後〉の思想』東方出版、2009

『坂本訓訳』：坂本幸男・岩本裕訳注『法華経』岩波文庫

『中公訳』：松濤誠廉・丹治昭義・桂紹隆訳『大乘仏典 4、5 法華経』中公文庫

『土田本』：荻原雲来・土田勝弥『改訂 梵文法華経』山喜房

『中村瑞訳』：中村瑞隆『現代語訳 法華経』下 春秋社

藤井『妙法華』：藤井教公『現代語訳 妙法蓮華経』アルヒーフ、2010

『妙』、『妙法華』：鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』『大正蔵』第九卷

『梵和辞』：『漢訳対照 梵和大辞典』新装版、1986

注

(1) 荻谷『〈仏滅後〉』の「序論」参照。

(2) 荻谷〔2014〕の「オリジナルの『法華経』」の表（p.11）参照。但し、そのうち「第4章」、「第5章」、さらには「第7章 従地涌出品」は削除する。それ故、オリジナル『法華経』は残りの七章から成るというのが、目下の私見である。

- (3) 荻谷〔2019〕参照。
- (4) 「ほさつ」とは、「現行法師品」の冒頭「この会座にある…声聞乘に属する者、独覚乘に属する者、(A) (大乘の) 菩薩乘に属する者…これらの者全ては (B) (本来から) ほさつ (bodhisattva) である」(196, 5-8) ——この一文は本来「見宝塔品」の冒頭に存したと想定される——の文中の (A) 「(大乘の) 菩薩 (bodhisattva)」と (B) 「(本来から) ほさつ (bodhisattva)」とを区別するために、私に (B) の 'bodhisattva' を “ほさつ” と平仮名で表記したもので、オリジナル『法華経』における「(仏乘) のほさつ」の意味である。
- (5) この 'bodhisattva-sahasra' を『岩本訳』は「六十の…幾千万億という求法者」と訳し、『中公訳』は何の註記もなしに、『妙』「六万恒河沙等菩薩摩訶薩」(39c25-26) に追従して、「六万の…菩薩たち」と訳出している。それに対して『植木訳』はその注7（下、pp.212以下）で、この 'bodhisattva-sahasra' を無視して、その上で延々と講釈を展開するが、全くもって首肯出来るものではない。尚『中村瑞訳』は詳細に異本を列挙する。
- (6) 「眷属 (parivāra) は、「序品」の冒頭、会座の衆を列挙するなか、「(A) マハープラジャーパティーを始めとする㊦六千人の比丘尼が（一緒にいた）。そして (B) ヤショーダーラー比丘尼も㊧眷属を伴っていた (sa-parivārayā)」(2, 5-7) とあるのが初出である。この (A) ㊦「比丘尼」と (B) ㊧「眷属」とはどのように違うのか、疑問である。しかも、この語は、この後「勸持品」に「六の、“千の比丘尼” (六×千=六千比丘尼の) の眷属を有する (ṣaḍ-bhikṣuṇī-sahasra) マハープラジャーパティー比丘尼も、(同じく) 四の、“千の比丘尼” (四×千=四千比丘尼) の眷属を有するヤショーダーラー比丘尼も」(231, 8-9) とあるのが、人界の四衆に関する限りの二度目なのである。そのように比丘尼に限ってのみ言われてきた「眷属」が本章にきたって、突然、菩薩、それも「地涌ほさつ」に限って言われており、これが三度目なのであって、このことだけでも、本章において「眷属」の語が出る文段は、全て“後分”と見做しても、決して過言ではないであろう。
- (7) この (B) の後分であることは明白で、この段階でこのようなことを述べてしまっただけでは、後の弥勒の「これらの者はどこからやって来

たのか」(257, 20-21) という疑念とそれに応えた釈尊の回答たる〔8-(B)〕(262, 12-14) は全く無用のものとなるのである。

- (8) 'rāṣi' (群団) は、「法華経」で19回出るうち、14回は本章であって、その初めが当該箇処 (256, 4) である。ところで、この「地涌ほさつ」の数については、長行〔2〕で「六万洹河沙に等しい」(253, 11) とあり、それを指して、長行〔3〕の「多なるコーティー・ナユタ・百・千のほさつ」(253, 20) とあって、この文言の他には、明確に示したところはない。そこに、上記の注(6)に言うように、「眷属」という概念が、本章の地涌ほさつにも持ち込まれて、まず「これら地涌ほさつの一人ひとりには、丁度、同じ六万洹河沙に等しい菩薩たちがあって、それら地涌ほさつの一人ひとりの眷属なのである」(253, 12-15) という“第一次の言及”があり、「それら地涌ほさつの一人ひとりとは六十・洹河沙に等しい“千の菩薩”の眷属の“ガナの所有者”(gaṇin)、“大なるガナの所有者”(mahā-gaṇin)、“ガナの教師”(gaṇa-ācārya) である」(254, 1-2) と言われたのである。さらにその後、その眷属の数について、六万洹河沙の眷属を持つほさつから、順次、数を減じて、眷属を有しない単独のほさつに至るまでのほさつがあったと、“数字遊び”の増嵩がなされて(第二次の言及)、その結果、じつに“厩大なほさつ・群団”(mahato bodhisattva-rāṣi) が形成されたのである。そのため、第一次の「六万洹河沙に等しい地涌ほさつの一人ひとりと同数の眷属を持つ“ガナの所有者”である」ということでは済まされないことになって、その上に立つこの「大なるほさつ・群団」の“首座”ということで、大群団の“統帥者”が考え出されたのである(第三次の言及)。それが「上行」、「無辺行」、「浄行」、「安立行」の「四大菩薩」であり、謂わば“師団長”ともいうべき“首座”が四人もいるというのである。

この概念の形成に当っては、そのヒントとなったものとして、突飛と思われようが「序品」で、釈尊が無量義処三昧に入って大地が六種震動した直後、会座の衆のなかの四衆や天等の八部衆等と一緒に坐していた「王侯(rāja) や、一国を支配する(maṇḍalin) “(軍事) 力の輪を転ずる者”(bala-cakra-vartin) や“四州の、(法) 輪を転じて(支配する) 者”(catur-dvīpaka-cakra-vartin) ら、そして、それら眷属を持つ者(sa-parivāra) ら全て」(4, 14-16) ——この文

を含めた文段全体（4, 12-17）が“後分”——の文が考えられる。それというのも、「軍事力に依って一国を支配する者」即ち“軍隊によって国を支配する王”というところの、軍隊組織における一師団の“師団長”にこの大群団の“首座”のイメージが、そして首座の“四人”であることには、四州の、法輪を転じて治める“転輪聖王”のイメージが汲み取られるからである。即ち、この四大洲のうち、南瞻部洲（閻浮提）は娑婆世界のことであり、釈尊はこの娑婆世界の教主にして、そこを教法領域（sāsana）とするのであって、その娑婆世界の〈仏滅後〉に地上に出現するのが「上行菩薩」を首座とする「地涌ほさつ」に他ならない故、『法華経』最終章「如来神力品」に「上行菩薩」だけが出てくるのである。それに対して「無辺行」等の三人の“首座”は、残りの大洲の首座で、娑婆世界とは無縁の者である故、この当該箇処の他には全く出てこない理由が納得されるといえるものである。

- (9) この語句は、次の「コーティー…千のほさつ」が会座の衆全員を指しているにも拘らず、冒頭〔1〕「他方世界からやって来た菩薩」と誤って解した後代の書写生の衍文である。
- (10) この ‘ākhyāhi no tasya nāma loka-dhātor vināyaka’（〔偈28d〕）の ‘tasya’ について、『妙』「願説其所從国土之名号」（40d25）は誤訳である。諸『日本語訳』は全てその是非を分別することなく、『妙』に追従して、「その国土」の名」と訳している。しかし長行〔2〕に「私にはすでにこの娑婆世界に六十恒河沙に等しい“ほさつらの千”（=六万）が存する」（253, 11-12）と明言されている。もっとも、これが後分であるとしても、長行〔3〕には、「この娑婆世界は至る処で裂け、裂け破れた。そしてその裂け目から多なるコーティー…千のほさつらが涌き出てきた」（253, 18-20）とあって、これら地涌ほさつは娑婆世界に属する地下の場所から涌出したことは明白である。しかも〔偈25〕に「誰によって教法が説示されたのか、誰によって正覚に向けて出立せしめられたのか、誰の教法領域で習修したのか、誰の教誡憶持者なのか」とじつに執拗に問うているのであって、これが「世間の保護者（=“仏”）の名」であること、明白である。
- (11) ‘prayata’ について、『妙』「汝等当共一心」（41a15-16）は次下に「当精進一心」（41a20）とある故に「共当一心（共に心を一にすべし）」

であるべきである。ところが、『坂本訓訳』は前者を「当に共に一心に」(中、306)、後者を「当に精進して心を一にすべし」(中、306)とあって、自家撞着をきたしている。藤井『妙法華』も前者を「ともに一心に」(265)、後者を「心専一になれ」(266)とあって自家撞着に陥っている。しかも、‘prayata’は「自制した、恭しい、敬虔な」(『梵和辞』866R)であって「心を一にする」という意味はない。それ故、恐らく、これは「羅什所依梵本」に、‘prayatta’(「…専心した」(『梵和辞』1074R)とあったか、或いは羅什が‘prayata’を‘prayatta’と見誤ったのであろう。ちなみに諸『日本語訳』のなかで『中村瑞訳』のみ「真に心を一つにせねばならぬ」(下、67)、「心を一つにすべきである」(下、68)とあって、羅什訳を正しく訓読した上で、羅什訳に追従して「その世界の名を」と訳している。

- (12) 但し、[偈33ab]「善男子らよ。お前たちは全て自制心を持つ者であれかし。如来(である私)は誤りの無い言辞(gira)を発するのである」と、[偈36cd]「私は今やその働き(=「重要事項の内容」、[現行本]‘tān adya ham dharma’をG本に依って‘tat adya ham karma’^カと私に校定)を説き明かさんとしているのだ。それがどのようなもので、どのようなか(「現行本」を‘vādrśaka yathā ca tat’^タと私に校定—但し、これが韻律に叶うかは考慮の外である)、私の(言葉を)聞くべし」とを合して〔新・偈33〕とすれば、長行〔7-(A)、(B)〕に一致し、その重偈となる。
- (13) この‘karman’は、『妙』「若聞是語 或不信受而起破法罪業因縁」(41c25-26)と的確に訳出されているにも拘らず、諸『日本語訳』は単に「行為」と訳している—『植木訳』「[身体の]行ないと心の働き(=これは‘abhisamkāra’の訳語—引用者)」(下、209)は論外として—が、しかし乍ら、ここでは「業」^{ゴウ}の意味である。
- (14) 勿論、このように臆測するには、「如来寿量品」の精説が不可欠であるが、その一端は拙稿「『法華経』の釈尊は「永遠仏」か」(『桂林学叢』第30号掲載予定)、さらには拙稿「不軽菩薩『我深敬』等の二十四字と日蓮の題目」(『花野充道博士古稀記念論文集』所収予定)でなしている。